

現代中国における仏教教育機関の調査報告

望 月 海 慧

はじめに 二〇〇七年一月に愛知学院大学の養輪顕量先生より、現代中国における仏教教育の研究調査の誘いを受けた。筆者は、前年に身延山大学開学四五〇記念の『みのぶ』誌連載企画で「中国における仏教教育」の項を担当していたのだが、残念ながらそれを論じることができるような知識も有しておらず、敦煌は国際仏教学研究センターであつたとまとめることで逃げたばかりであつた。そのことへの反省もあり、是非この機会に現代中国においてどのような仏教教育が行われているのかを見たいと思つた。ここに、拙稿の補遺を兼ねて、簡単な調査記録を記す。学術的な報告については、養輪先生によるものを待ちたいと思う。

現代中国における仏教教育機関の調査報告（望月）

中国に出かけるのは、二十数年ぶりである。大学四年時に、「日蓮宗の信行道場に入れば中国に連れて行く」と言うような甘い言葉に誘われて、兄弟子と上海、蘭州、敦煌、トゥルファン、ウルムチを訪れて以来である。当時は仏教には全く興味はなく、映画と音楽と文学の毎日だった。その後、チベット仏教を専門に研究するようになり、世界中の多くの地域を旅行するようになるのが、中国を再び訪れることはなかった。その理由は中国が個人旅行に適さないこととチベット問題をあげてきたが、本当のところは世界には他に面白いところが沢山あったからである。今回は民主化に移行する中国を見て、そこで仏教がどのような現状であるのかを知りたいと思い、

現代中国における仏教教育機関の調査報告（望月）

調査に出かけることにした。

三月七日 教授会を終わり、名誉教授慰労会を欠席して、成田へ向かう。前年にモロッコへの調査旅行に出かけた際にはフランス・カフカの『城』のようにさまざまな障害があり、出発直前に北ウイングに車を横付けしカウンターに走ったということがあったが、今回は朝の便のため、成田に前泊し、余裕をもって出かけることができる。

三月八日 シャトル・バスにて空港に向かう。集合場所には旅行代理店の人しかおらず、この先の旅が不安になる。旅の友は、『地球の歩き方』（ダイヤモンド社）と『旅の指さし会話帳』（情報センター出版局）である。今回もいつものように事前調査をする時間もなく、機内で旅先のデータを頭に入れる。ただし、ホテルの手配と現地の移動手段を考える必要がなく、とても楽な旅立ちであった。

三時間程のフライトで、上海に到着。名古屋からフライトの先生と合流し、ミニバンで上海市内に向かう。増築中の空港から、リニアに平行して走る。市内のいたるところで建築ラッシュによるインフラ整備が行われている。二〇一〇年の上海万博に向けてもあるのだろうか、景気を回復したとされる日本よりも多くの資本が投入されているようである。上海駅前を通り過ぎ、最初に向かったのは玉佛禅寺である。

玉佛禅寺 本寺は、一八八二年に慧根により創建された上海最大の禅宗寺院である。慧根は四川、チベットを経てインドに修行に向かった僧侶であり、帰路にミャンマーにおいて五体の玉仏を入手し、そのうちの二体を安置するために本寺は建立された。正面に釈迦像が安置されている大雄宝殿、向かいに天王殿、左右が銅仏堂と観音堂、奥に玉仏楼と禅堂という配置になっている。その屋根や彫刻には、三国志と西遊記が彫られており、その人氣が



玉佛禪寺の参拝の様子

わかる。

まず驚いたのは、参拝者の年齢が低いことである。女性同士の友人というパターンもあれば、異性と一緒に参拝するというパターンも多く見られた。彼らは、大きな線香に火をつけて、それを手にしたままお祈りをし、それを供養する。中国寺院には若者を引き付ける魅力が備わっていると言うよりも、彼らの心の中に寺院に出かけさせるような気持ちが残っているであろう。

玉仏については、玉佛樓の二階にある高さ一九五センチメートルの釈迦像は、部屋奥に鎮座しており、その威厳を十分に感じることができた。それに対して臥仏堂二階にあるもう一点の玉仏臥象は、土産物売り場の中に設置されており、前者のような荘厳な感じは得られなかった。その大きさの違いもあるのだが、その待遇は大きく異なっていた。

本寺には上海仏学院が設置されているが、残念ながら今回は訪問することはできなかったが、次の出版物を入

手することができた。

『玉佛丈室集』第七集、一九九四年、上海学林出版社

『大方廣佛華嚴經普賢行願品』中国佛学院

『佛説長壽滅罪護諸童子陀羅尼經白話翻訳』弘化叢書

『佛説阿弥陀經』弘化常用佛典

『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品』上海佛学書局

『心經十小咒・大悲咒』上海佛学書局

これらの書籍は、付設する仏学研究所の研究成果をまとめた学術書と参拝者が読誦するための經典テキストであり、無料配布されたものである。一般の人々に信仰の有り難さを伝えることに重点をおく日本の諸宗の布教方法を越え、彼らに經典の内容を理解してもらうためにテキスト自身を提示するだけでなく、学問としての仏教の研究成果も提示している。夕勤を拝見し、玉佛禪寺を後にする。

豫園 中国人研究者と合流のため、豫園に向かう。二十数年ぶりに再訪した豫園は、相変わらずの賑わいである。ブランドのコピー商品を販売も行われている。その違法性は認識しているが、彼らの生活の現状とその取締りを中国政府に訴える西欧資本家を比べると、正義の意味を考えてしまう。ボードリヤールを読んで二十五年、ピンク・フロイドの「ビッグ」を聴いてから三十年も過ぎてしまった。

夕食後、外灘にて東方明珠塔を中心とした黄浦江の夜景を楽しむ。和平飯店の老年爵士楽団は戦前の上海の面影を伝えていた。新天地は、今回の楽しみとなる。

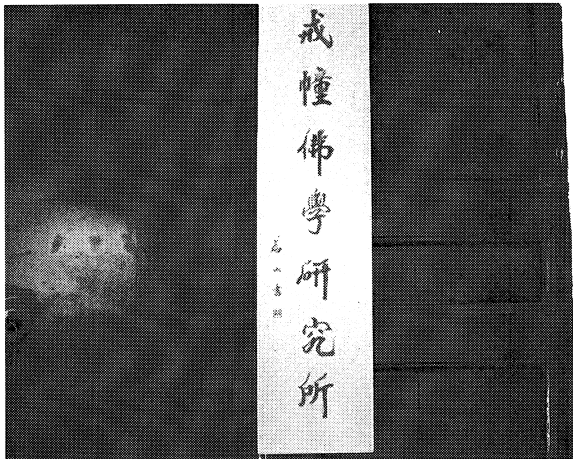
三月九日 上海から高速道路を西に走り、蘇州に向かう。二時間程走り、東洋のブルージュとも言える蘇州市内に入る。北寺報恩塔を左手に見ながら走る旧市街にはチャン・イモーの映画にもでてきそうな昔の運河が残されている。

西園戒幢律寺　まずは戒幢律寺に向かう。門をくぐり、鼓樓と鐘樓を左右にして、天王殿の脇にある寺院敷設の食堂「功德林」にて素食（精進料理）の昼食をとる。湯葉や豆腐等を用いて肉を表現することが、心理的問題を扱う仏教において意味があるのかは疑問であるが、これはある種の仏教文化であり、十分に研究の対象となりうるものである。食堂の脇には、元僧継公が血で書いたとされる『華嚴經』が収められた碑が設置されている。

食後、大雄宝殿を参拝し、静修堂を見学した後に、戒幢仏学研究所と仏学院を訪問する。教室となる三学堂を拝見すると、入り口横の掲示板には私と同名の学生が呼び出されていた。図書室には、仏典と研究書だけでなく、中国各地の仏学研究所の研究誌などが並べられており、興味を引いた。書籍購買部も併設されており、仏学院での教科書および研究書を購入することができる。購入書籍は次のものである。

『戒幢佛学』第一巻、二〇〇二年

現代中国における仏教教育機関の調査報告（望月）



西園戒幢律寺にある仏学研究所

『戒幢佛学』第三卷、二〇〇五年

済群『真理与謬論』（戒幢佛学論双）二〇〇四年、上海古籍出版社

済群『菩提心与道次第』（戒幢佛学論双）二〇〇五年、上海古籍出版社

隆運『入菩薩行論広解』（戒幢佛学論双）二〇〇五年、上海古籍出版社

済群『普賢行願品の観修原理』二〇〇六年、戒幢佛学研究

最初の佛学研究所の紀要については、第一号が論文数三六本四一九頁、第三号が論文数四九本六二五頁の大部の論集である。収録される論文も中国仏教に関するものだけでなく、ツォンカパの『菩提道次第論』、松本史朗氏の如来蔵批判、『チャラカ本集』、西田幾多郎などに関するものが見られ、研究分野の多様性をうかがうことができるだけでなく、執筆者には惠敏氏などの台湾の学者もおり、大陸と台湾との研究交流がうかがえる。「戒

幢佛学論双」は、マイトレヤの『中辺分別論』、ツォンカパの『菩提道次第論』、シャーンティデーヴァの『入菩薩行論』に対する解説書である。

続いて、仏学研究所長の済群師と面会した。仏学研究所の基本的なカリキュラムは、発菩提心・戒律・止・観などの七項目に基づいているとのことである。この点についてアティシャの『菩提道灯論』との関係を質問したところ、同論およびツォンカパの『菩提道次第論』の影響があるとのことである。どちらのテキストも法尊により近代に中国語に翻訳されていることから、容易に読むことはできるのだが、仏学院のカリキュラムが伝統的な中国仏教主体のものからインド・チベット仏教に移行していることに驚いた。師は、近年の仏教学研究の中心課題として「人間仏教」にも言及された。これは同師の済群法師『人生（上下全十巻）』（二〇〇六年、上海古籍出版社）にも論じられている。これは近年、タイやアメリカで盛んな社会参加仏教（エンゲイジド・ブディズム）



建設中の戒幢律寺三宝楼

にも通じるものであり、最新の研究動向にも注意を払っているようである。面談の後、師の案内で建設中の三宝楼を見学する。この施設は、仏学研究所の学生のための教室並びに講堂、および寮から成り、その規模は本学の倍程の大きなものであった。最後に五百羅漢堂を参拝し、同寺を後にする。

寒山寺 今回の調査地の中で、事前にその名前を知っていたのが本寺である。南北朝梁の天監年間（五〇二～五一九年）に創建された禅宗寺院であり、焼失と再建を繰り返し、現在のものは清末に再建された。「寒山十得」をどのような機会に知ったのかは、今では定かではないが、高校生の頃に「古典」の試験で赤点を取った頃であろうか。全くの観光寺院であり、多くの観光客で賑わっていた。今回は、同寺を訪れたことのない私だけのために訪れたようなものである。五重塔もあり、運河コースにも面し、蘇州入門の寺院である。ただし西条八十の

「蘇州夜曲」に歌われる「おぼろの月に鐘が鳴ります寒山寺」（もちろん原曲ではなく崑山美由紀ヴァージョンである）とはいかなかった。

文廟 夕暮れが近づき、市の南部にある文廟に急いで向かってもらう。参道にある骨董市場はほとんど閉まっており、文廟と宋代石刻の写真を撮る。ここは二〇〇一年に全国重物に指定されている。

玄妙観 蘇州最大の繁華街である観前街にある玄妙観は、西晋時代に建立された道教の宮観である。すでに閉門しており内部には入れないが、中国の三大木造建築の一つともされる三清殿は壮大である。それを囲むように並んでいる商店街は浅草のような印象である。山門前の観前街は歩行者天国になっており、多くの若者で賑わっている。夕食をとった石路も蘇州の隠れた繁華街であり、デパ地下を楽しむ、専門店で花茶を購入する。

三月一日 蘇州市内から郊外の西に車を走らせ、太湖を見下ろす靈巖山寺に向かう。ただし名物の鱺がかかっており、太湖を目にすることはなかった。

靈巖山寺 浄土道場と刻まれた山門を入り、参道を山の頂上まで三〇分ほど登る。左右には出店があり、多くの参拝者で賑わっていた。本寺についてはすでに半世紀前に牧田諦亮氏により詳細に報告されているが、文化大革命の頃とは全く異なった賑わいを取り戻しているのではないだろうか。中日友好の碑の脇をさらに登り、大雄殿を参拝した後、念仏堂を見学し、奥にある中国仏学院靈巖山分院を訪問、住持の明学法師と面会する。同師には、印光法師のことを話していただいた。また寺の僧侶は一七五名おり、その内の六〇名が仏学院の生徒である。台湾の同名寺院の妙蓮法師も本寺出身で、師のクラスメイトだったそうである。教室を見学すると、机の上には学生の教科書が積んである。時間割を見ると、午前三コ



靈巖山寺の山門

マ、午後三コマの週六日制である。科目は、菩薩戒・地藏經・無量壽經・印公文鈔が週四コマあり、これに仏教史・国情・作文などが加えられている。

境内には多宝仏塔もあるが、こちらまで来る人はあまりいなかった。塔の正面には書籍部もある。また参道を少し下り、脇に入ると印光大師全身舍利塔があるのだが、ここまで来る参拝者はさらに少なく、先ほどの賑わいとは感じさせない。

蘇州市内に戻り昼食後、蘇州の運河文化を調査し、杭州に向かう。拙政園、留園、網師園、獅子林などの多くの世界遺産は、次回に訪れることにする。

杭州 杭州は、学生時代に大室幹雄の『西湖案内』（岩波書店、一九八五年）を読んで以来、是非訪れたいと思っていた地である。夕暮れの杭州市内で驚いたのが夜行寝台バスである。混雑する市内を走っていると、隣を走るバスが二段ベッドの寝台を備えていたのである。広大な

現代中国における仏教教育機関の調査報告（望月）

国土であるが故に、交通網のインフラ整備が十分におこなわれず、このようなバスが活躍するのだろうか、「水曜どうでしょう」で見た我が国の深夜バスに比べると、この方が快適に寝れそうでもある。夕食をとった呉山広場地区は昔の中国の街並を再現した通りがある。さらに西湖の湖畔を散歩し、「カサブランカ」にて、研修の反省会を行う。前年に列車で素通りしたこの白い街はどのようなところかと思いつながら、「Fly me to the Moon」「Close to me」を歌われると少し情緒的になる。

三月一日 最後の研修日は、浙江省の寺院並びに仏学院・仏学研究所の調査である。西湖の寺院についてはすでに七十年前にも春日礼智氏により報告され、文革前の貴重な情報を提供している。

霊隠寺 三二六年にインド人の慧理により開山され、一〇世紀末には一三〇〇の僧房があったとされる霊隠寺は



霊隠寺山門

中国で最も拝観料収入があると言われる寺院である。磨崖仏を見ながら大雄宝殿の横にある建物に案内される。

そこでは、杭州仏教会会長も務める杭州仏学院院長をはじめとする一八名の講師陣が集まっており、我々との会談がセッティングされていた。

杭州仏教学院は、靈隱寺ではなく天竺寺に一九九九年より設置され、二〇〇六年に政府の認可を受けている。

生徒数は八〇名で三年制の専門科の上に四年制の研究科があり、また仏学院では初めての芸術センター（宗教芸術）のコースが設置されている。教員数は二二名で、天台学・浄土学・因明・インド仏教史・仏教美術・体育（カンフー）などの専門家がおり、中には浙江大学との兼任の教員もいた。因明については、ダルマキールティの論理学も研究しており、ここでもチベット仏教の影響を感じた。

会談後に精進料理の会食をし、境内を散策すると、そこにはチベット僧の参拝者もいた。寺には五百羅漢堂が

あり、南の岩山には多くの石仏が彫られており、中には宋の時代のものもある。

西泠印社 靈隱寺を後にして、西湖に面した中山公園にある西泠印社を訪れる。一九〇四年に葉為銘や丁仁らにより設立された金石篆刻の研究施設は、日本の研究者との交流も盛んなようである。漢三老石室には、二〇〇〇年近く前に彫られた碑文が収められているとのことだが、それよりも西泠印社の印鑑が気になり、鶏血石で一本彫ってもらう。

浄慈寺 禅宗の五山の一つと言われる九五四年に建てられた浄慈寺は、西湖畔の雷峰夕照の向かいにある。中国曹洞宗第一三世の如浄禅師は、道元の中国留学時の師でもあることから、本寺は日本の曹洞宗とも関係がある。寺院の説明を受け、裏山の西湖を見下ろす場所にある如浄禅師の墓所を参拝する。大雄殿に戻ると夕勤が行われ



浄慈寺にある如浄禅師墓碑

ており、中国式法要に参列する。浄慈寺の「南屏晚鐘」は高さ三メートル、重さ一〇トンの青銅製の大きな鐘であり、『妙法蓮華経』が鐘に刻まれているということに気づいたのは、帰国後であった。

毛沢東や江青の別荘跡を通りすぎ、龍井茶の製法の見学をする。中国最高級のお茶にも数えあげられる龍井茶であるが、新茶の季節にはまだ早く、前年度のものを購入する。

三月一二日 最終日は、昼の便にて帰国である。空港に向かう前に、市内の書店にて書籍を購入する。購入図書は次の通りである。

松本史朗（肖平・楊金萍訳）『縁起与空——如来蔵思想批判』二〇〇六年、中国人民大学出版社

エリザベス・ナッパー（刘宇光訳）『蔵伝佛教中観哲学』二〇〇六年、中国人民大学出版社

洛桑杰嘉措編著『図解西藏密宗』二〇〇七年、陝西

季羨林『我的人生』二〇〇六年、中国青年出版社

季羨林著・季羨林研究所編『季羨林談佛』二〇〇六

年、当代中国出版社

季羨林『佛教十五題』二〇〇七年、中華書局

前二書は、欧米の宗教学・仏教学者の著書の中国語訳の叢書である。仏教に関するものは他にリチャード・H・

ロビンソン、ウィラード・L・ジョンソンの『仏教史概論』、ピーター・ハーヴェイの『仏教倫理学導論』が、

宗教学には、ファン・デル・ルーエの『宗教現象学』がある。松本氏の著書などからも、このシリーズの編者はある程度、松本氏の著書などからも、このシリーズの編者はある。松本氏の著書などからも、このシリーズの編者はある。松本氏の著書などからも、このシリーズの編者はある。

宗教学・仏教学研究のトレンッドに敏感なようである。我が国でも海外の優れた研究書の和訳を積極的に出版すべきである。またアジア最大の東洋学者である季羨林の著

その闘病記まで出版されているのには驚いた。彼が学問的レベルだけでなく、一般の人々にも尊敬される存在で

現代中国における仏教教育機関の調査報告（望月）

越容『水晶梵音』(Crystal Chanting)

を購入した。ジャケットの美しい姿からその美声を想像したのがその購入理由の一つであるが、そこに収録されている曲のタイトルは、

自由 (六字大明咒) Freedom (Om Mani Pedme Hong)

觀音靈感歌
Guanyin Inspiration

大吉祥天女咒 Sri maha devi dharani

般若波羅密多心經 The Prajna Paramita Sutra

種子（緣度母心咒） Seed (Tara Mantra)

などであり、明らかにチベット仏教の影響を受けたものである。

郊外の空港に向かい銭塘江を超えると、高速道路に沿って独特のスタイルで建てられた新築の家が立ち並ぶ。杭州・成田の直行便は便利であるが、利用者は上海便に比

現代中国における仏教教育機関の調査報告（望月）

べると少なかった。

今回の調査旅行は、短期間のものではあったが、それだけでも現在の中国仏教の教育機関である仏学院仏学研究所のカリキュラムの一端を知ることができた。それは伝統的な中国仏教の教育研究だけでなく、社会参加仏教や仏教論理学などの欧米の研究動向にも注目しており、さらにはチベット仏教をも積極的に取り入れていることである。これは仏学院を指導する立場にある研究者が、最新の仏教学研究の成果を教育カリキュラムに積極的に取り入れる傾向にあることを意味している。

参考文献

- 春日礼智「西湖の寺院と浄土教」『日華仏教研究会年報』二、一九三七年、二五五—二八五頁
- 牧田諦亮「現代中国仏教の生活規範」『仏教大学研究紀要』三五、一九五八年、二三八—二七〇頁
- 身延山大学東洋文化研究所編『知恩報恩』身延山大学、二〇〇七年

養輪顕量「台湾現代仏教事情——中台禪寺を中心に——」『人間文化』一四、一九九九年

同右「台湾の仏教」『東洋学術研究』三九—一、二〇〇〇年

同右「現代台湾仏教における師弟の育成について——仏学院・

仏学研究所を中心に——」一八、二〇〇三年、六九—八三頁

同右「台湾における仏七簡介——西蓮淨苑を中心に——」『禪研究

所紀要』三五、二〇〇五年、一〇五—一一八頁

同右「台湾における修行「仏七」と門派化の進む寺院——西蓮

淨苑・慧日講堂・南普陀寺・靈巖山寺・仏光山」『人間文化』

二一、二〇〇六年、一一—一八頁

同右「台湾の現代仏教」『バーリ学仏教文化学』二〇、二〇〇

六年、一一—二一頁

望月海慧「中国における仏教教育」『みのぶ』九七—六、二〇

〇六年、二四—二七頁